



体育史上から見た体育の変遷について(1):
古代,中世の体育

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 清野, 市治 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/3330

体育史上から見た体育の変遷について (1)

— 古代, 中世の体育 —

清野市治

On the Change of Physical Education from the Viewpoint of the History of Physical Education (I)

— The Physical Education of Ancient
Times and the Middle Ages —

Ichiji Seino

Abstract

Whenever the world is in a critical situation, people find a new interest in historical studies of various subjects. And when people are going to make a plan for the better days to come, they discover a new meaning in a lot of historical facts.

The author tries to throw a light on the relation between physical education and various complicated forces which had a remarkable influence on the development of physical education, such as politics, religion, economy, art, military affairs, and climatic and geographical circumstances of those days.

An ideal image of man which has been described in the long history of mankind varies with the times. Each of the times has its own characteristic view of both the body and physical education.

This paper is an attempt to consider the ideal physical education of the present times, paying attention to such a historical change.

I. 緒 言

形のあるなしに関わりなく、人類がその長い歴史のなかで作りだしたものをすべて文化とよぶならば、教育もまた一つの文化にちがいないのであるから、教育の歴史は文化一般の歴史の中で、その一部として他の芸術や経済や宗教や政治などと関係を保ちながら取り扱うことができる。しかし同時にまた教育的な事実を中心とする問題史として、特に深くこれを叙して行くこ

ともできるわけである。取り扱う問題の範囲の広さから云うと、教育史と文化史との関係は、体育史と教育史との関係にもあてはまるのである。教育の歴史は教育という事実を広く全般的に問題として取り扱っていくのであるが、体育の歴史は人類が長いその歴史を通して、それぞれの時代や場所で身体や身体運動をどのように理解し、どのような目的や目標のもとに、どのような方法を講じたかを中心の問題として取り扱うのである。先ず正確な資料を得ることが体育史研究方法の一步であるといってもよいと思う。正確な史実によるという点では体育の歴史は他の諸文化の歴史に比べて立ちおくれているように思われる。ことに日本の体育史についてその感が深い。史料に乏しいということも一つの理由であるが、史的研究に関心をもつものが少なかったことも大きな理由である。では体育史の叙述はどの時代からはじめればよいか、ヴォイレ (weule) のスポーツ史によれば戦闘のためであれ、狩のためであれ、娯楽のためであれ、身体運動、わけでも大筋中心の運動がある目的をもって行なわれた事実は、われわれの歴史と共に古いといわれている。しかし将来の体育のありかたについて現在のわれわれの態度を定めるには必ずしも原始未開の昔にまでさかのぼる必要はないと思う。現在のわれわれの体育思想や実践に最も大きな関連を持つものとしては、古くからわが国に影響を与えた儒仏思想や、武士階級を中心に発展した武士道徳、それらを背景として発展してきた武術の外に欧米の体育思想や運動技術が考えられるが中でも欧米の体育思想や運動技術はその主流を形成している。欧米の体育もまた歴史以前にその源を求められるが、しかしテルモピレーやサラミスの戦のあった紀元前 480 年を中心とする約 1 世紀半の間のギリシャからはじめて十分であると考え考察することにする。

II. 古代の体育

1. ギリシャ体育の発展と意義

古代の文化国民であるエジプト人、アッシリヤ人、ペルシャ人、フェニキ

ヤ人、バビロニア人などの間では体育は国防能力や戦闘技能の向上を目標として行なわれたのであるが、それがギリシャでは、教育的な価値と国民的な意義から行なわれた。既に紀元前800年の時代に走、跳、角力などが、行なわれていた。しかし初期の競技は王侯貴族の間だけで行なわれそれは純粋に貴族的な性格のものであって神々や死者の霊をなぐさめ、賓客を遇するためのものであった。ギリシャ体育について最もすぐれた資料を提供しているフィロストラトスの「体操について」によると、紀元前776年にはじまったオリンピアの競技では13オリンピアド（紀元前728年）まではスタヂオン走(Stadion, 3つの意味を持つ、(a)競走路の長さデルフィでは178m オリンピアでは192m エジプトでは210m, 平均して古代ギリシャでは164m (b)この距離の走そのものを意味する。(c)走路を意味する。)だけであり、18オリンピアド（紀元前708年）にはじめて男子の五種競技が行なわれるようになった。そのご紀元前600年代になって、軽重技の種類も多くなり、スタヂオン走、往復走、長距離走、武装競走、五種競技、角力、拳闘、パンクラチオンなどが行なわれるようになった。スパルタ人は体操運動に特に興味をもち、プラトンによると裸で練習をし、身体に油をぬった最初のギリシャ人であった。裸体の体育運動とならんで合理的な体育や温冷、水浴やマッサージなどが行なわれた。運動の指導者は、子供達の態度や健康状態を監督しなければならなかった。それでかれ等実際の経験を総合して健康や衛生の細則をつくった。このようにして時代が進むにしたがって自然療法が発達し、体操は広い意味で疾病の予防に役立つようになった。医療体操を造った人はセリンブリアのヘロヂコス(Herodikos) 紀元前5世紀といわれている。体操家と医師とは長い間同じ概念であった。ギリシャの体操は、ペルシャ戦役(紀元前500~479)でその国民的統一のきずなとしての役割を發揮した、アテネはスパルタに代わって全ギリシャの政治の中心となり、東方専制諸国からの脅威を排除し、短かくはあったが国民統一の期間と、政治的文化的黄金時代をもつことができた。体操的な競技を中心として行なわれたオリンピアその他の汎ギリシャ祭礼はギリシャ全土の連関性の象徴となり、体操は、言語や宗教

と同様にギリシャの諸民族の結合に大きな役割を果たした。体操は音楽と共に教育の主要教科となり、組織的に行なわれ、身体を訓練し、技能を身につけることは、身心の調和を企図する前提であり、身体美は、精神的道徳的堪能（カロカガチア—nobleness and goodness）とならんで重んじられた。ギリシャの体操は、ただ青少年の教育だけでなく全自由市民の教育に適用され法律によって規定されていた。しかしギリシャの体操は国民の上層をしめていた一部の自由市民だけのものであって国民の大部分をしめた下層階級にはほとんど関係のないものであった。ギリシャ人は精神的な素質と身体的素質をひとしく教育し向上させることが神々に対する義務であると考え、体操的な運動を宗教的祭礼の本質的な要素とした。また体育と並行して弦楽器の演奏や舞踊の指導による音楽教育が行なわれ偉大な詩人の作品や哲学者の研究が行なわれて教育を一層完全なものにした。しかしながらギリシャの黄金時代は決して長くは続かなかった。ガーヂナー（Gardiner）によると紀元前500年から440年までの間であった。アテネが政治的に衰微するにつれて国民の気風も変性堕落しそれが体操にも影響を与えた。上流社会の若者達はパレストラの熱砂の中で行なわれる角力のような努力的な運動をきらって安易な馬車競走等をえらんだ。体操や競技のもつ高い倫理的な価値は、運動の特殊化によって甚だしく減殺され、調和的発達のかわりに身体の一部が一方的に特に発達するようになった。競技の重圧と賞品と関連した利害関係に刺戟されて過度の練習が強制され、余暇を楽しむというよりも全生活をこれに打ち込む傾向を生じてきた。かつては全く自由で明朗な競技であったものが、暫時一つの職業と化し、粗暴、卑劣な手段もあえて辞しないありさまとなった。この時代の競技がどんなに堕落していたかについては後で述べるが、エウリピデスがアウトリコスという劇の中で「そこで無頼漢どもはギリシャ各地を徘徊している。しかし彼等も競技者ほど悪質ではない」と述べていることでも想像できる。カイロネイアの戦（紀元前338年）に敗れてから、アテネの国力も次第に衰え、マケドニアのアレキサンダー大王が支配するようになってから、ギリシャの体育は他の文化と共にアレキサンドリヤに伝わり、更に

ギリシャがローマの支配下に入った。その後約1000年に亘る長い中世紀の忘却時代を経て古代文芸の復興と同時に想起され、人文主義者、実学的教育思想家を経てロック、ルソーに伝えられ、更にそれがドイツ汎愛派の教育者達の業績へと発展し近代体育の源流をなすようになった。

2. 汎ギリシャ祭礼競技

ギリシャの体育は近代の世界の体育の源流としてわれわれに深い連関をもっているが、中でもオリンピヤで行なわれた汎ギリシャ祭礼競技は近代オリンピック競技として復活され、現代人の生活に重要な位置を占めている。ギリシャ人は多くの独立した都市国家を形成していたにもかかわらず汎ギリシャ精神によって強く結合されていた。それには彼等の同族意識や、ホメロスの詩などに表現された彼等の祖先の汎ギリシャ的な団結に対するあこがれなどが大きな原因となっていたと考えられるが、そうした意識やあこがれは次第に汎ギリシャ的祭礼として発展し、それがまた逆にギリシャ人の汎ギリシャ精神の高揚に拍車をかけるようになった。これらの祭礼の中心的行事は競技であった。これらの競技は、前史時代北方からペロポネソス半島に南下してきたアカイヤ族、ドーリヤ族によってはじめられたものである。これらの民族は今日のギリシャ地方に住む地中海民族とはちがって、今日の北欧人種に最も近いインドゲルマン民族であった。それは古墳発掘や人類学、土俗学の考証によっても明らかであり、ホメロスの詩にうたわれている女神や英雄の姿態描写を見ても北欧人の特徴が遺憾なく表現されている。オリンピヤの競技ペロポネソス半島の西海岸に流れ込んでいるアルプエウス河沿にオリンピヤ平原がある。そこにゼウスを主神とする諸神の彫像、競技場その他の公共施設があり、これらを総称してオリンピヤと呼んだ。紀元前776年から競技の優勝者を登録するようになった。それ以来4年目毎にゼウス (Zeus) をたたえて夏至後の満月を中心として行なわれ、祭礼から次の祭礼までの4カ年を、オリンピアド (Olympiad) と呼び紀年の単位とした。競技の目的はゼウスをはじめ諸神の霊をなぐさめ、その榮譽をたたえると共に、競技の

優勝者を表彰するにあつた。競技の日数や種目は次第に増加し、最初はスタヂオン走だけを1日に終了したのがスタヂオンの往復走、長距離走、五種競技、拳闘、戦車競走、パンクラチオン、武装競走、ラッパ手、伝令官の競技などが加えられ祭礼行事と共に5日間（そのうち3日間が競技）に行なわれるようになった。審判や選手の資格についても厳しい規定があつて両者とも神罰、刑罰を受けたものはその資格が認められなかつた。審判はエリス市民の選挙によって決定され、最初の頃は2名であつたが後に10名になった。競技者は純粹のギリシャ自由民の男子であり、ギムナジオンで10カ月以上練習をつんだものであることを条件としこの条件にかなつたものは祭日の30日前試験をうけ、これに合格したものだけが、祭日までの期間を審判官の指導のもとに練習を続け競技出場が許可された。審判官は祭礼11日前にギリシャ全土に休戦を宣告し（その期間は1カ月前）この期間には一切の戦闘行為が停止された。日程の第1日には盛大な供物式典や、競技者の資格審査、審判官、競技者の宣誓式等が行なわれ、第2日から4日にかけて競技が行なわれ第5日には再び祭典が行なわれ、多くの詩人、哲学者、雄弁家、芸術家達はその思想や作品を民衆に紹介した。有名な歴史家ヘロドトス(Herodotos)がアテネに関する歴史的研究をはじめて講演したのもここであつた。優勝者はアルティスの森の橄欖の枝でつくつた冠をかぶせられ、奏楽と合唱の中を、金糸銀糸の祭礼服を着て聖林を練り進んだ。また彼等の故郷に帰る際には、時に4頭立ての馬車を駆り、特に設けられた凱旋門から入国した。その名は碑に刻まれ詩にうたわれ、その彫像はオリンピヤや郷里に建てられその他多くの特権が与えられた。このようにオリンピヤの祭礼は後代の体育ばかりでなく学問や芸術の発展の上にも極めて重要な役割を果した。オリンピヤの競技がギリシャの国民生活にとって如何に重要な意義をもつていたかということは、オリンピヤのスタヂオンの長さ(600呎)が距離測定単位となつていたこと、紀元前776年をギリシャの紀元元年としたこと、スタヂオン走の勝者の名でオリンピアードを示し、何某オリンピアードと呼んだことなどで理解できる。その他の祭礼競技にはピチヤ(Pithia) イストミヤ(Isthomia) ネ

メヤ (Nema) の三大競技があるが後代におよぼした影響の点ではオリンピックのそれに比すべくもなかった。

3. ギリシャの思想家とその体育観

ギリシャの思想家や自然科学者の体育に対する考え方や観方は後代の体育思想の基本的な方向を示唆している。ソクラテスやプラトンの思想には、いずれも古典時代の堅実なアテネの社会をあこがれ、これにかえらなければならないという復古的な思想が強くにじみ出ている。即ち彼等は体育の価値を道徳的、教育的な立場から認めるとともに、身体的技能を体得することを市民の義務であると考えている。その身体観については、これを精神と対立させる二元論の立場に立ちつつも、常に精神を優位におき、身体を精神の最も忠実な下僕とすることを理想と考えていた。この思想は後代キリスト教徒によって継承され精神を尊ぶのあまり身体を卑しめ、積極的な体育を否定する思想となり、健康の意義と価値を人間生活の中に見出し、これを積極的に推進させようとした文芸復興期以後の思想家や汎愛派の教育者達の思想についてみても、いざんとして精神の主体性を守り続ける傾向がみられ、ラメトリーを代表とする近代フランス唯物主義者を除いては、いずれも同一線上にあるとみてよい。アリストテレスとヒポクラテスは共に自然科学的な立場に立って運動実施上の注意や運動の効果等を述べているが、中でもヒポクラテスは「医の父」と呼ばれ、科学としての医の基礎をきずいた人であり、後代の合理主義の体育に方向をあたえた人である。エウリピデスは自作の断片詩アウトリコスの中で「ギリシャの土地から生れた禍の中で、競技者の競技よりも大きな禍はない」と述べ競技および競技者に対して否定的な態度を明らかにしている。彼がギリシャ屈指の悲劇詩人として社会事象の暗い面を深く掘り下げて描いたにして退廃期の競技の実態を想像させるに十分である。しかし彼が神事として身体の美と力の表現にカロカガチャとの調和を求めようとせず、戦場動作と競技との非関連性をなげいている点では、ソクラテスやプラトンに見られる復古主義の思想もうかがい知ることができる。

4. ギリシャの人間観と体育

(1) 現代の体育を理解しようとして、まず最初にとりあげられる時代は、古代ギリシャである。それ以前にも体育は存在したのであろうが、ギリシャ時代にさかのぼることをもって十分と考える。それでは、古代ギリシャの体育を規定したものは何であるか、体育史を通してみるができるが、ここでは主としてギリシャの人間観によって限定されたところの体育現実を考察することにする。

(2) ギリシャといってもそれぞれの都市国家によって存立の様式を異にするのであるが、ギリシャ的なものを代表する中心を、スパルタよりもアテネに求めようとするのが一般的である。したがって、アテネの人間観をみることによって、ギリシャの人間観を代表することとなる。

(3) 古代ギリシャの教育の研究者達は「人生の調和」においてギリシャ教育の理念を見出している。この考えを逆にいえば、望ましい人間性を調和において求めたともいうことができる。彼等の形成的イデアを人間自体に求めようとするれば、それは調和的人間性であるとみることができる。このような調和的人間性を、具体的にいうならば、まず人間存在、を身体的、知的、精神的の各方面においてながめ、しかも、これらの諸方面の相互依存的関係を認識していたということが出来る。そしてこれらの諸方面のはたらきを発達として眺めるとき、いわゆるギリシャの立場は、人間における「調和的發展」(harmonious development) を求めているということが出来る。

(4) 以上の如き点は、ギリシャ人が残しているいろいろの言葉によっても知ることができる。例えば、ペリクレス (Perikles B. C. 500~429) は、「我々は知を愛し、これを追求する、しかし身体的虚弱はこれをさける我々は美を愛し、これを追求する。しかし悪趣味と放奢はこれをさける」(K. J. Freeman, School of Hellas, 1927 p. 276) とのべ、一方において人間の知識を愛し、これを追求することを主張するのであるが、しかしこれのみに偏るときは、身体が軟弱になるとして、身体的なものとの調和を求めようとし

ている。同じことが美の追求においても現われている。即ちペリクレスによれば、美を求めることは極めて望ましいことであるが、それを熱望する余り、悪趣味や放蕩におちることをさげ、そこに調和のある美を求めようとするのである。

(5) 彼と同じ思想はプラトン (Plato B. C. 427~347) においても明らかにみることができる。周知のごとくギリシャの教育は「音楽」と「体操」であった。しかし、この場合音楽にしても、体操にしても、度を過すということは、人間性の調和を破るものとして、それをいましめている。例えばプラトンによれば体操が度を過すと頑固になるが、また音楽が度を過すと軟弱になるといっている。我々はこれによって、プラトンの調和的人間観をみることができるのである。人間における頑固、野卑は、性格的にみても、それは極端を示すものである。同じく柔弱、怯懦もまた、極端である。人間性におけるこのような極端をさけて、両極端の間に正しい表現をみることが、いうまでもなく調和である。「調和的精神は、節制と勇氣とをもち、不調和の精神は怯懦と野卑なものである」というプラトンの言葉からみてもわかるように、調和的人間は、プラトンによれば、「野卑」が、他の極の限定によって統一されたところの「真の勇氣」や「調和と節制」においてみられるというのである。プラトンは、このような立場から、体操の長所を認めながらも、もしそれによって、身体の優美さを誇り、元気のあふれる余り、これが増長するならば音楽の求めるところの知性はくもり、愚鈍になり、文化を知らず、美に対するセンスをも失ってしまう。また文学的なものを求めて、度を失うならば、軟弱無力になるとして体操と音楽の平衡調和を求めているのである。かくてギリシャ人、ことにアテネにおいては、自由な個人における、知的なものとの身体的なものとの調和を求め、また性格や情緒において調和的な発展を求めていたことを知ることができる。

(6) 調和を求め、調和において人間の理想を見出したところのギリシャでは、体操もまたその人間観に従うものである。ギリシャでは、現代人が理解しているような体育という概念は存在しなかったが、「体操」の求めるもの

が、まさにそれに他ならなかったのである。ギリシャでは、少年時代に、美術や文学をも含む「音楽」とほぼ同じ比重をもって、自由遊戯、槍投、円盤投、競走、跳躍、レスリングなどを含めた「体操」が行なわれたのである。これによって実際の人間としてではなく、いわば教養ある人間を求めたといえる。従って美的感覚をさそう人体の美や、完全性をますます発展させ、同時に健康や体力の基礎を、このような身体的活動によって形成しようとしたのであるが、性格的なもの知性的なものをそれに調和させようとしたのは、確かにギリシャ体育の特質であるといえることができる。

5. ローマの体育

ローマ人はいくぶんスパルタ人に似た性格をもち、実利的で質実剛健な気風をそなえていた。その教育の目的も愛国心に富み、法律を守り、名誉を重んじ質朴な公民を養成するにあった。ローマ人の体育は、ギリシャ文明が移入する前と後では余程趣がちがっている。軍事的成功によってえたローマの富と急速な繁栄は国民生活を暫次変貌させた。殊に紀元前146年ローマがギリシャを征服して、ギリシャの文明がローマに伝わるにつれ、ローマ人はアテネの教育法を採用するようになった。しかしこのような革命的な変化も決して急速に実現されたわけではなかったことは、プルタルコス (Plutarkhos) やカトー (Cato, Marcus Porcius) その他の史家の語っている通りである。即ち、そこには絶えず古朴簡素なローマ上代の精神への復帰と、ヘレニズム文化に対する反撥と弾圧が繰り返された。しかし大勢のおもむくところ如何ともしがたく、紀元前27年帝政を布いてからは皇帝は新しい学習を奨励保護した、そのためにギリシャ文学や哲学は、ローマ帝国の広大な範囲に拡大普及していった。このことは、たしかに西洋文明史上特筆すべき事柄の一つである。考えて見ると政治的にはローマはギリシャを征服したが思想的には、逆にギリシャによって征服されたとも云えるのである。このことは後代の体育発展にとっても最も重要な意味もっている。帝政時代の体育は殆んど見るべきものがなかった。質実な上代ローマの美風は破壊され、修辭に巧な人

物をつくることがその目標となり、身体に関する注意や、その養成は、ぜいたくな沐浴生活に限られた。帝政時代のローマ人は大競技場を建設し、職業競技者や剣客をたたかわせたり、強い野蛮人や奴隷や囚人と猛獣をたたかわせて楽しんだ。ローマ人もすぐれた身体的な技能やたくましい筋力に関心はもったが、それらの技能や筋力は、ただ観賞の対象としてのものであり動物の堪能さや力と同列のものであった。アテネの競技にみられたような心の美しにさ、人間としての高さを意味するものではなかった。ローマ人の中で教育対してすぐれた見識をもっていた人にクインチリアヌス (M. F. Quintilianus) プルタルコス、ユヴェナリス (D. J. Juvenalis) 等がいる。体育についてあまり述べられていないがユヴェナリスの「健全な身体には健全な精神が宿ることが望ましい」(Optandum est, ut sit mens sana in corpore sano) という言葉は千古の金言として多くの人々によって引用されている。その一二の例をあげると、英国のロックはその著「教育論」の中でコメニウスは「大教授論」の中で我が学校体育の開拓者リーランドはその「体育論」の中でそれぞれこの言葉を引用し現代においても多くの人々が引用しその偉大さを物語っている。

6. ローマ人の人間観と体育

(1) ローマは、ギリシャの文化を模倣しようとしたが、調和的人間とそれに基づいて人生の充実を図ろうとする、いわば教養としての体育は、ローマ時代になると完全に失われた。

(2) ローマ人は、アテネのように個人の価値を認めるよりか、かえって人間を国家との関係においてながめ国家に有能なる人間を価値ある存在としたのである。したがって、ギリシャのように最高完全さを現わす人間よりも、むしろ国家のために働きうる実践的人間を尊重したのである。ローマにおける実践的人間とは軍事的能力をもつ人間をさしていた。そして教育は軍事的活動の能力をあげるための訓練であった。軍事訓練のために、ギリシャ時代に行なわれたいろいろの身体活動が用いられたのである。

(3) 更にまた、ローマ人は、ギリシャの競技の外観を模倣したが、それは個人の心身の調和的發展を求めためだけでなく興味の対象として、スポーツを観たギリシャでは、一般の自由人がすべて競技に参加したが、ローマでは参加よりもいわゆる職業的競技者のスポーツを見物することに人気があった。これはローマが退廃して、奢侈的生活に疲れ強烈な刺戟を求めてそれに興奮を感じようとする要求に適したわけである。

(4) 我々は、全体主義的人間観に奉仕する体育の原型をローマにおいてみることができる。体育の意味は、行なうところの身体活動の様式によってきまるよりも、むしろ如何なる人間を作り出そうとするかによって、その機能をみることができる。この意味において、ローマ国家に奉仕する人間のための体育が、ローマの体育の一つの姿であるといえる。つぎに体育は自己の活動によって自己を形成する限りにおいて重要な意味を発見するのである。したがって体育は、いろいろの身体活動に参加するところに意味がある。もしこの関係をはなれたならば、それは最早体育でない。この事実をローマにおいてみることができるのである。

(5) 我々が、しばしば用いるところのローマの詩人ユヴェナリスの金言が現われたのは、ローマ時代精神に基づくものではなく、余りにも腐敗したローマの現実をのがれて、ギリシャの心身の調和を願わんとする諷刺的な言葉であるとも考えられるのである。

7. ゲルマン人の移動と体育

ゲルマン人移動の意義について述べれば、紀元4世紀の終わり頃ゲルマン人の各部族が民族移動を開始し、ローマ帝国の各地に侵入した。この移動は約200年間続き、その間紀元476年にはゲルマン族が西部ヨーロッパの支配者となった。ゲルマン人の侵入には二つの重要な意味をもっている。第1は、それまで発展してきた文明を破壊し西洋を知的暗黒に追い込んだことである。そのため、この状態から立ち直るのに約1,000年を要した。この間体育はもとより古代文芸もほとんどかえりみられなかった。第2は、ゲルマン

人の侵入によって、軟弱化していたローマ人の血に、清新で若々しいゲルマン人の血を注入したことである。即ちヨーロッパはこの若々しい生命力を基調として次第に暗黒時代から脱出し、更に古代ギリシャ、ローマの学問や芸術の復活に対し活潑な活動を展開することができた。したがって体育史上においてゲルマン人の移動は、古代ゲルマン人が如何に身体的にも精神的にも有能であったかということよりも、その優秀な資質が近代体育や教育に対して大きな推進力となったかということに意義があると考ええる。

8. 古代体育の概観

西洋古代の体育を概観してみると、ギリシャやローマの体育は時代により社会によってその様相に若干の相違があるが、なおそこに幾多の共通点をもっている。ギリシャ、ローマの体育を通して云えることは、第1にその当初においていずれも質実剛健で国家に忠実な兵士をつくることを目標とし、国家主義、軍事主義の傾向が強く、後半において文化が進み平和が持続すると共に次第に感性的、職業的な性格をおびてきたことである。第2に体育は貴族社会のもので他の文化的な活動と共に極く少数の人々の間にだけの独占物であった。このような条件は必然的に古代社会が滅亡して新しい生命に燃えた中世社会として更生すべき要因となった。この時ゲルマン人の大移動が始まり、階級と人種と国境を超えた「万民尽く神の子なり」というキリスト教の福音が提示されたのである。

III. 中世の体育

1. キリスト教と体育

キリスト教は人類大衆がその行動の方向を定め、人類の理想を実現する上に必要な基本的な生活原理を示した。プラトンやアリストテレスやストア派の人々の教理は、主として知に訴えたために、比較的少数の人々によって理解されたに過ぎないが、キリスト教は情意に訴え、何人でも理解のできる目

標を与えた。古代思想とキリスト教思想とを比較してみると古代思想が現世的、主知的、階級的であったに対してキリスト教思想の特色は来世的、主情的、平等的、唯神的であった。キリスト教の来世、唯神、主情主義は、その教育を通世禁欲の方向に導き僧院制度を発展させた。僧院学校の教育の目的が教養のあるキリスト教の僧侶を養成するにあったので、その方法は厳格を極めた。学科は聖書、教父の文章の理解およびその研究であって、その他7つの自由科目(文法、修辭、弁証法、音楽、算術、天文、幾可)が課せられた。したがって古代社会で行なわれたような積極的な体育運動は行なわれなかった。しかし日曜や祭日には遊戯、遠足などが行なわれ、毎日少なくとも7時間の開墾、農業、大工、鍛冶等の仕事があった。労働がベネヂクスの戒律によって定められていた。多少の相違は認められるにしても、大体において古代社会の体育が国家全体主義の色調をおびていたに対して、キリスト教の体育は神性全体主義とも云うべき性質のものであった。しかし前に述べたように、禁欲的ではあるが、退廃したローマの唯物主義に対する。そのきびしい精神主義に体育史上重要な意義があると考え。なぜならば体育の目標は「精神の改善である」というプラトンの体育観はキリスト教によって復活され、ともすると唯物的な方向を示す後代の体育に常にきびしい反省をあたえているからである。今日の体育についてみても、その意志修練の方面は、方法と程度の差はあるが、正しくキリスト教の教育と一直線につながっていると考える。ただ体育が積極と消極の両面の調和統一にある限り、キリスト教の偏狭な精神主義は決して健全であるとは云いがたい。近代の文明諸国の青年キリスト教連盟がこの点に着目して身体もまた神の造りたもうものであり、これを守り育てることこそ正しい考え方であると、新しいキリスト教徒の体育を樹立したのである。その後文芸の復興時代を経て18世紀の末葉に汎愛派の教育者達によって、近代的な実践に一步をふみ出すまで、体育は約1,000年をキリスト教徒の手にゆだねなければならなかった。ただその間に騎士の階級で行なわれた体育は、思想的には何等みるべきものがなかったけれども、方法的には後代体育の教材として利用されたものが少なくな

かった。

2. 騎士の体育

紀元12世紀頃から世俗教育がおこり、貴族の子弟に対して騎士的な教育が行なわれるようになった。騎士教育の目的は愛と戦争と宗教になれ、高尚で勇敢な人格を養成するにあった。しかし12世紀以前は騎士の英雄時代とも云われ、一方では神につかえる超現世的な方面があるとともに、他方においては祖国および君主につかえるという現世的な方面もあって、スパルタの教育に似た所があったが、12世紀以後は騎士の作法時代とも云われ、武芸を修練し、貴婦人に奉仕してその機嫌をとることが重要であるとされた。騎士の体育はその後復興したギリシャ、ローマの教育思想とよく調和し、文芸復興期の指導者達を通じ後代体育に長く影響をあたえた。

3. 身体的なものの否定と体育

(1) ローマ帝国が崩壊してから後、およそ1,000年間は「中世」とよばれ、ときとしては、この時代を「暗黒時代」ともよばれた。中世においては、ギリシャ、ローマの学問は大部分その影をひそめ、正規の教育が等閑にされたというだけでなく、一般にそれが軽視された時代である。この意味で中世は文化的、学問的にも暗黒時代であった。中世のこのような一般的な無知に対する反動として、知性的なものを求め、かつローマの末期における野獸的な人間性に対する反動として、身体的なものの軽視の立場をとり、更に身体を否定しようとする人間観が現われた。その一つはスコラ哲学の立場であり、他は禁欲主義の立場である。

(2) スコラ哲学 (scholasticism) は、人間における知的なものを尊重する。即ち知ること推理することを讚美し尊敬する。この点はギリシャの知性尊重と同一であるが、ギリシャにおける調和的な人間観とは異なって、知的なものを一般化し、精神的なものの優位を認めている。精神に優位性をもたせる余り、身体的なものを全然相容れない傾向をもってきた。スコラ哲学の基盤

はここにあった。スコラ哲学においては、人間における身体的なものおよび身体的幸福を過少に評価する。またこの学派からすれば、身体的なものは否定すべきものであるとみている。したがって彼等の立場からすれば、活動性と素朴性をその特質とするところの身体的活動は、何等考慮に値しないものとなるのである。

(3) 体育は、このような立場そのものを否定することから出発しなければならない。おさえることのできない身体活動への衝動や欲求を根底にして体育が出発するのであるから、このようなスコラ主義的な立場を超えてそこに妥当性を見出すことによって、体育が認められるのである。しかし、このスコラ主義的なものは、そう簡単にはなくなるものではない。現に「学者(スコラー)の中には、これらの思想に通ずるものがある。この人達は、現代においても、相変わらず統一体としての人間生命を忘れて、知性的なもののみを求めようとする。」この意味で、スコラ哲学の立場はまさに体育の正しい発展のために、考えなければならない問題である。

(4) スコラ主義に類似するものに、アッセティシズム (asceticism) 禁欲主義がある。これは、退廃期のローマ人が、感覚的なものに満足を求め、それに溺れることに反抗して起ったもので、人間の本質を、肉体的、感覚的なものの追求者とみないで、むしろ永遠、絶体なるものを求めるものとみる宗教的人間観に立つものである。この禁欲主義は、キリスト教初期に発達したもので (a) 極端なる自己否定 (初期) (b) 僧院の独居生活 (c) ピューリタニズム (後期) において、それぞれその立場を現わしている。これらの共通な点は、厳格な、快楽のない生活において、人間生活の理想を見出そうとするところにある。

(5) この人間観は、一言にしていえば霊肉を対立するものとし、人間の身体をもって、一時的なものとし、永遠に生命をもつものとみるのである。したがって人間における霊的なものの栄光のためには、肉体を退化させることもいとわず、極端な場合には感覚的、情欲的なものの根源、なやみや苦心の根源としての肉体を虐待し、更に否定することによって、霊の栄光を求めよ

うとするのである。

(6) このような立場からは、積極的な正しい体育は生れない。体育は、身体的活動を通して人間形成をはかろうとするのであるから、まず身体的なものを認めねばならない。しかし禁欲主義者が肉体を苦しめ、肉体の彼方に永遠なものを求めようとするとき必要な「忍耐」は、望ましいものである。ここで我々は、苦の原理としてみるのではなくむしろ忍耐の原理として、身体的なものを肯定しつつ苦しみの彼方に、なお人間的なものの完成の道を見ようとする深い体育の立場に基礎をあたえたものと見ることができる。

IV. 第1報のまとめ

古代、中世の体育をまとめてみると

1. 古代体育の特色

(1) 調和的人間像を目的とした体育であったと考えられる。その代表としてアテネの体育が上げられると思う、即ち身体的訓練と知的、道徳的な訓練が平行して行なわれた。またプラトンの二元的人間観の思想は中世キリスト教の身体観に発展し、文芸復興期以後の思想家に継承され、現代にまでおよんでいる。

(2) 汎ギリシャ祭礼競技の意義は本文において述べているが、祭礼競技の最も代表的なものはオリンピア競技で近代オリンピック競技によき伝統を伝えたと考えられる。

(3) ローマ体育の最もよき代表は、ユヴェナリスの金言で今日でも多くの人々に引用されている。また低俗な主観的娯楽としてのスポーツも特色として考えられる。

(4) ゲルマン人のローマ侵入が体育におよぼした影響も大きかった。即ちチュートン族の男性的な強靱な体力と意志力が、軟弱化したローマ人の血にゲルマン人の若々しい血が注がれた。そのために欧州が次第に暗黒時代から

立ち上るようになったのである。

2. 中世体育の特色

(1) キリスト教的身体観、即ち身体は悪魔のもの、魂は神のもの両者は全く相容れないものという理論であった。現世的な営みは悪であるという考え方と結びつき、身体および身体的なもの一切を否定する禁欲主義として発展させ、更に僧院制度を作り、ここでは体育のない教育であり、現代的な意味における体育を否定した教育であった。キリスト教の教育において体育史上の意義を見出とすれば、むしろ長く後世の積極的な体育の発展に少なからず抵抗を与えたという点と、その目ざした人間像の持つ精神性に意義があると考える。

(2) スコラ哲学が体育に与えた影響を考える必要がある。第1に一切の問題解決の際、外部的な権威の引用によって、真摯な研究心を抑圧する態度を発展させた。第2には大人の立場で構成されたカリキュラムを子供等の興味や自主性を無視して強制、注入する態度を発展させた。その他は本文に述べたことにより想像することができる。

(3) 騎士の教育は古代スパルタの教育に近いものがあったがその体育運動はギリシャにおける如く、身体の完全な発達とか身心の調和的発達とかを目ざしたものでなかった。また初期のローマ人の如く高い民族意識や愛国心の養成を目標としたものでなく専ら個人的、実用的な立場から技能の上達を求めたのである。したがって騎士の体育が後代に伝えたものは、その精神的な面よりも、態度、作法や身体活動の形式的な面であったと考えられる。その後文芸復興期の思想家や教育者を通して後代の体育にも長く影響を与えている。

古代、中世の体育を基礎として近世、現代へと発展してゆくのである。

(昭和45年5月20日受理)

文 献

- 1) 今村嘉雄・石井トミ訳： ライス世界体育史 (S-30), p. 44.
- 2) 今村嘉雄： 西洋体育史(上), (S-32).
- 3) 帆足理一郎： 西洋哲学史 (S-28).
- 4) 今村嘉雄： 体育の歴史 (S-29), p. 4, 5, 9, 10, 13.
- 5) 加藤橘夫： 体育の世界史 (S-33), p. 3, 59, 148.